四季録

モノというもの

10代後半から40歳ころにかけて、気に入る漂着物や石を求めて海岸や川に足しげく通った。持ち帰った流木やガラクタを組み合わせてオブジェのようなものを作ったり、石を眺めたりして、ひとり悦に入っていた。しかし、浜辺に打ち寄せる物は変質し、生々しく荒れてきたこともあり、遠のいてしまっていた。

10年ほど前、オブジェ部屋満杯の拾い物が懐かしく見えてきて、本にすれば一つの形になるのではないかと思い立った。中からピックアップして撮影。そして出合った時々の空気のようなものを思い返しながら今の心境を織り交ぜた文章を添え「風景を拾う―THE GLEANER」と題し、出版にこぎ着けた。

人に見てもらうつもりなどなかったモノたちだが、これをきっかけに最初で最後だと、オブジェ展を宇和島で開いた。一度は目に留まったありとあらゆるものを、恥ずかしさもへったくれもなく会場にてんこ盛りにした。

それらは、いわゆる収集などとは遠い感覚、いま巷で連呼される「こだわりの…」なんてものとも違う。こだわるとは往々にして偏狭さにつながる。僕の場合、もっと広がりのある視座で拾っているつもり。

そんなモノたちを会場で見ながら思ったことがある。僕の抽象的な絵を前にして「いったい何を描いたの？」と問う人はあっても、置かれているモノを指して「これ何？」と言う人はいない。〝見えるものは誰しも同じように見えて在る〟と信じる連帯的安堵感からか。たしかにここにあるのは、木、鉄、ガラス、プラスチック、石だ。だがモノとて見え方は一様ではないと思うのだが。

比べて絵というものは、抽象画、風景画、静物画、いずれにしてもそこにモノの実在はなく、描かれているものを手で摑むことはできない。まさに完全純粋平面といえる世界。絵とモノはそこが違う。

ということは具象画も抽象画も同じこと。何を描いているかと問う前に、もっと絵そのものにスッと入ってきてもらえないものか。頭や先入観などからっぽにして見てほしいといつも思う。きれいな空を見て、感じる前にその理由を考えたり、美しい鳥の声を聞いて、この音は何を表しているのかではおかしい。

僕のモノとの触れ合いは、それらが醸し出す空気、風の景色（風景）を同時に見、感知しているのだ。食物を摂って体を維持するように、風景を拾いながらインスピレーションや力を得てきたのだろう。

モノでいっぱいの会場にいて、平面絵画に惹かれる自分をあらためて確認する、おもしろく貴重な体験でもあった。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2020/08/30 面名:文化 ページ:013
(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。